

「ISS（インターナショナルセーフスクール）の取組を安全指導に活かす」

亀岡市学校保健会  
(亀岡市立曾我部小学校)

1 研究（取組）の動機

本校は、児童数 165 名の小規模校である。

亀岡市は、平成 20 年 3 月に国内初となるセーフコミュニティ（SC）の認証を受けた。安心・安全に対する意識が高まる中、本校は平成 25 年にインターナショナルセーフスクール（以下 ISS）の国際認証取得宣言を行い、取組を進めてきた。ISS は 3 年を区切りに認証センターの審査があり、本校は平成 27 年度と平成 30 年度に認証を受けた。

ISS は、単に“けがや事故のリスクがない 100%安全な学校”をつくるということではなく、“安心で安全な学校づくりのための仕組みを確立すること”を目指す取組である。ISS の認証を受けることを目標にしながら、児童は自分自身を守る力をつけること、教職員は危機管理意識を維持向上させること、地域では幅広い連携と協力でセーフティネットがひろがることを目指した。

安心安全を学校教育の基盤に位置づけ ISS 認証を全校の目標に据えることで、画一的になりがちだった安全指導について、学校全体で組織的に工夫や見直しができるのではないかと考えた。

2 研究（取組）の内容

(1) 校区の【危険マップ】と【安全マップ】の作成

ア 第 1 段階

教職員と PTA が主体となり警察の協力も得て、校区内の危険箇所（交通・防犯・自然災害）や“こども 110 番の家”を地図に書き入れ、児童とともに確認した。

イ 第 2 段階

“危険マップ”をもとに大学の協力を得て、児童と教職員が一斉下校時にワークショップをしながら、現場をみて危険な様子を確認した。

ウ 第 3 段階

地域班ごとに“危険マップ”に掲載されている危険箇所に、自分たちの命を守る措置がとられていることを児童がみつけ地図に書き入れ、“安全マップ”を作成した。

エ 第 4 段階

参観日に、主に通学路を中心に、安全のために考えられていることや設置されているものを確認しながら保護者と児童と教職員で一斉下校を実施した。

(2) 避難訓練の工夫

本校では、年間 3 回の避難訓練を実施している。

火災や地震が起こり避難するとき、大人が近くにいるとは限らない。災害が起こった時、自分で考えてどう避難行動をとるのかということ“考える”機会として避難訓練を実施した。

ア 【釜石の奇跡】（DVD）を視聴して、異年齢班で話し合いをした。

イ 遊歩時、地震と火災が発生した想定で、校内数カ所に仕掛けをつくり、教職員の指導・引率なしに避難行動をとった。

ウ 避難訓練の際の事前指導には、教室備え付けの副読本を活用し、事後指導ではシートを使って振り返りを行った。

### (3) けがデータを元にしたセーフキッズプログラム（生活の自己点検）の取組

I S S の評価基準の一つに、「入手及び活用可能な根拠に基づく」プログラムを実施することがある。学校管理下で発生するけがのデータをとりため、時期や状況に応じて自分の学校生活を振り返る取組を積み重ねた。

○取り組んだテーマ

- ① 9月のけが      ② 教室のけが      ③ 掃除中のけが      ④ 転倒しておこるけが  
⑤ 校舎内のけが      ⑥ 1学期のけがの様子（昨年と比べて）

### 3 研究（取組）の成果

I S S の評価基準のひとつである「外傷の発生頻度や原因などを記録する」ことに努め、養護教諭不在時も含めてけがの大小にかかわらず来室したもの全てについて集計することができた。安心して安全な学校をつくるための仕組みをつくっていくプロセスに取り組む中、セーフキッズプログラムでは、児童がけがの少ない学校生活を過ごすために自分で何ができるのか、どうするのかを考える機会として計画した。けがデータを元に課題を意識させ、けがを少なくするために自分の行動の目標を決め、行動してみてどうだったのかを繰り返し、セーフキッズプログラムの取組として定着させた。

安全マップの作成では、教職員・P T A ・地域・児童が協働して実施することができた。その過程で、児童は自分たちの身の回りの危険や安全対策について知ったり、気づいたり、グループワークでは話し合ったり、表現したりすることができた。

避難訓練では、児童の意識を高めるための仕掛けを考えることができた。児童が訓練を振り返る中で、「黄色の安全帽子はどこに置いておくのがよいか」「（冬季）避難時に上着を持ち出すのか」「避難時にしゃべらないことについて」など児童から発信されたことについて、教職員が検討し合う場面もあった。

### 4 今後の課題

I S S 認証取得を目指すという状況が変わったとしても、児童が自分の事として安心・安全に暮らすためにどうするかを考える機会をつくること、教職員が同じ基準や価値観で指導すること、コンパクトにタイムリーに指導することの継続が必要である。

また、児童が意識するだけでなく、教職員の意識の維持・向上も重要である。危険予測の視点をもって、学校生活の環境面に気を配り、特に新しい指導内容では丁寧な事前指導と見守りを怠らないように心がけたい。けがが発生した時には、その発生経緯や状況を把握し、児童とともに考えたり適切な環境改善をしたりして再発防止に努めたい。

さらに、保護者や地域との協働は、関係者との話し合いなくして成り立たず、計画性がより一層求められる。

安全指導では、その過程で児童一人一人が生活経験を積み重ねることで、危険予測の力を育むことができると思う。発達段階に応じた指導を繰り返し継続していきたい。